

# メディア論と実践理論

門 部 昌 志

Media Theory and Practice Theory

Masashi MOMBE

**要旨：**本稿では、N. クールドリーの『メディア、社会、世界』（2012）を出発点として、今日のメディア論を考える上で重要な点を確認しつつ、実践理論とメディア論の接合を模索する。本稿ではまず、非メディア中心的な、社会指向のメディア論について述べ、メディア論のピラミッドないし四面体を通じて、メディア論内部における位置づけを確認する。さらに、メディアの効果がもたらされる社会と世界の関係やメディアそれ自体の概念についても検討する。次に、新たな理論的枠組みとしてクールドリーが依拠するシャツキの実践理論を紹介し、実践の定義や分散の実践並びに統合的実践について述べる。最後に、これらの議論を前提とした上で、メディア論と実践理論を相互に架橋する道を模索する。

**キーワード：**社会指向のメディア論、実践理論、分散の実践、統合的実践

## 1.1 社会指向のメディア論

N. クールドリー<sup>1</sup>の『メディア、社会、世界』（2012）の冒頭には、今日、メディアについて理論的に考える上で示唆に富む指摘が凝縮されている。序文では、従来のメディア中心的（media-centric）なメディア論とは異なる方向性が重視されている<sup>2</sup>。人々の日常生活においてメディアが最重要の意味をもつという従来のメディア研究の見方とは異なり、著者は、「日常的活

---

<sup>1</sup> 著者名の日本語表記にあたっては、YouTube上に複数ある、Couldryによる講演の動画等を部分的に視聴し、また『固有名詞英語発音辞典』で部分的に類似した名前の発音記号を参照したが、依然としてカタカナで表記することの限界を感じている。なお、講演の例としては下記がある。Couldry, N. (2013) "A Necessary Disenchantment: Myth, Agency and Injustice in the Digital Age" public lectures and events at London School of Economics and Political Science, <http://www.lse.ac.uk/lse-player?id=2120>, accessed at 30 August 2018

<sup>2</sup> 「中心主義」という言い回しからまず想起されるのは、ロゴス中心主義である。デリダ（1992）においては、ロゴス中心主義の前提は意味現前や伝達であり、音声ロゴス中心主義は、意味現前を重視するため、派生的で技術的で外部的な文字よりも直接的な音声を重視する発想である。こうした序列を転倒しつつ、議論の土俵である対立図式を掘り崩す作業が脱構築と呼ばれた。音声ロゴス中心主義批判とメディア論を肯定的な仕方で関連づけることも可能と思われるが、メディア論がもう一つの中心を再構成する危険性がないとはいえない。さて、クールドリー自身の用法は、前述のロゴス中心主義批判を全面に押し出すものというより制度的次元に関わっている。本稿では、メディアの影響力を重視した上、様々な要因のなかで、とりわけメディアに研究の意義を認める議論をメディア中心的メディア論と呼んでいる。

動や習慣」に眼を向ける。このような社会的基礎に留意するあり方は、技術としてのメディアそれ自体の変化が速い現代への対応とも考えられる (Couldry, 2012:x)。

クールドリーの非メディア中心的なメディア研究の向かう先は、社会的基盤の重視であり、社会理論である。もともと社会理論の領域ではメディアへの言及は稀であり、メディア論的な示唆を得るには制約が伴っていた。しかし、1990年代以降、ギデンズのモダニティ論を始めとして<sup>3</sup>、メディア論的視点を理論枠組に組み込んだ社会理論が現れる<sup>4</sup> (Couldry, 2012:ix)。これに対して、クールドリーは、メディア理論の側から社会理論への架橋を試みる。もともと、彼は、メディア中心の議論から社会中心の議論への転換を提唱するわけではない。クールドリーの議論は、社会中心の議論というよりむしろ、社会指向のメディア論である<sup>5</sup>。それは「メディアが構成し、そして可能にする社会過程」に焦点を絞る理論である (Couldry, 2012:8)。他の学問分野との関連では、文学、経済、技術史よりも、社会学、とりわけ社会理論との関係が重要となる。

クールドリーのいう社会指向のメディア論を考える際、広義のメディア論内部の相違、そしてメディアの効果がもたらされる社会と世界の関連について検討する必要がある。

## 1.2 メディア論のピラミッド

クールドリーにおける社会指向のメディア論は、メディア中心的なメディア理論との対比だけで理解されるべきではない。クールドリーの社会指向のメディア論が位置づけられるのは、メディア研究/テキスト分析やメディアの政治経済学など他のアプローチとの相違においてである。それを端的に示すのがメディア論のピラミッドである。クールドリーは広義のメディア理論をピラミッドないし四つの頂点をもつ四面体<sup>6</sup>として図に描き出す。メディア・テキスト分析に対比さ

---

なおCouldry (2006) では、メディア研究内部における種々の「中心主義」として具体的な例があげられている (全国メディアに対する地域メディアの研究上の軽視、最大のオーディエンスをもつメディアへの研究の集中傾向、また、オルタナティブ・メディアのもつ影響力の軽視など)。理論的な文脈では、Couldry (2006) には、ニーチェやフーコーへの言及が見られる。

<sup>3</sup> ギデンズのモダニティ論 (Giddens, 1990=1993) には時間と空間の問題系が含まれる。それによれば、かつて相互作用は「現場」の状況に埋め込まれていた。だが、均質な仕方で時間や空間を測定する時計や地図が発達・普及し、特定の時間や空間を超える調整を可能にする時刻表などが現れる。相互作用は現場のローカルなコンテキストから抜き出されて再編成される。この脱埋め込み過程 (disembedding) の例としては、信頼に基づく貨幣及び専門家システムがあげられる。筆者にとってメディア論的と思われる時空間の再編成という視点を理論枠組みに取り込んだギデンズは、イニスやマクルーハンに明示的に言及したことがある。「……メディアが社会の発展に対して持つインパクトを、特にモダニティの出現と結びつけて、精緻なかたちで理論化したのはイニスや彼に依拠したマクルーハンだけである。両者とも、支配的なメディアの種類と時空間の変形との結びつきを強調している。」(ギデンズ, 2005: 26頁)

<sup>4</sup> J.B.トンプソンは、『メディアとモダニティ メディアの社会理論』(1995年)のなかで相互作用を分類している (対面的相互作用、媒介された相互作用、媒介された疑似相互作用。ただし、媒介された疑似相互作用としては、マスコミュニケーションによって形成される社会関係が想定されている。なお、クールドリーの『メディア、社会、世界』の副題は「社会理論とデジタル・メディア実践」である。

<sup>5</sup> 「メディア社会学」をマス・メディアにおける生産過程の研究と「狭義」に捉えるのではなく、メディアのテキスト、生産過程と消費過程をめぐる社会学的研究として広義に捉える場合、クールドリーの研究は、彼自身はあまり強調しないものの、広義の「メディア社会学」に重なると思われる。ただし、クールドリーの場合、一般の人々によるデジタル・メディア実践 (検索、アーカイヴィング、コメンタリー等) に関する社会理論的、とりわけ実践理論による研究が強調されている。

<sup>6</sup> コミュニケーション論の領域では、既にダニエル・ブーニューによる「記号論的ピラミッド」が提示されている。パース、ラカン、デリダの交差する地点でなされた氏の議論とクールドリーの議論とは文脈は全く異なるが、「ピラミッド」という名称は共通している。クールドリーの「立体的」ピラミッドは、広義のメディア論の構造を粗描したものととして意義があると思われる。相違を明確にするためには、「メディア論」のピラミッドないし「四面体」と補足的に注記することも考えられる。なお、ここでは、影響関係を議論したわけではないことを念のために記しておく。

れるのは、メディアの生産・分配・受容の政治経済学的アプローチである。技術的特性を重視するメディア論の対極にあるのは<sup>7</sup>、メディア技術と内容の社会的な使用を重視する社会指向のメディア論である。これら四つのアプローチに対応するのが四面体の四つの頂点である。メディア論のピラミッドないし四面体は、固定されたヒエラルキーを示すためのものではなく、各自の重視するアプローチに応じて最も高い頂点を入れ換えることが想定されている。最上位の頂点を入れ換えてメディア論のピラミッドを回転させる方法には正解がないとされることから、社会指向のメディア論を最高位の頂点とするクールドリーの図は一つの例示と思われる。

ある時代に流行が生じると、各研究者の次元を超えて、特定のメディア論の発想が広く共有されることがある。特定のメディア理論が多くの人に重視されると、死角が生じることも考えられる。クールドリーの議論では、これら狭義における四つのメディア論の関係は排他的なものというよりむしろ、相補的なものとして考えられている。彼によれば、ある頂点ないしあるメディア論のアプローチからなされた研究は、対極にある頂点の観点に関わる「調査（と理論）」に依拠する必要があるという (Couldry, 2012:6)。さらに、メディア論の四面体が理論のみで完結するわけではないことは、彼の議論が「中範囲の概念ツール」として意図されていることに表れている<sup>8</sup>。

### 1.3 メディア、社会、世界

第一に、広義のメディア論内部における相違について確認してきた。クールドリーの社会指向のメディア論を考える場合、第二に、社会として、国だけが想定された議論ではないことを確認しておく必要がある。「社会」指向のメディア論を標榜するとはいえ、世界が意識されていることは、『メディア、社会、世界』というタイトルにも表れている。従来のメディアの効果研究では、メディアの効果及ぶ範囲として国民国家ないし国民社会 national society が想定されていた。国民国家は今もなお重要とはいえ、「『社会』はもはやナショナルな国境内部に限定されえない」との見方もある (Couldry, 2012:1)。さらに、国境を超えた現象の顕在化やそれに対する揺れ戻しの動きといった社会現象の次元ではなく、全体性としての社会概念それ自体が、社会理論では再検討されている。「ギデنزが述べるように、社会はもはや『全体』ではなく、国境と交差するかそれを無視する多くの他の流れや関係性の背景に対して現れる相対的な『システム性』の水準である」(Couldry, 2012:1)。こうした理論的見地からも、クールドリーは、「社会と世界」の双方に関連づけて、メディアの効果を検討すべきだと述べている。

### 1.4 メディア、環境、集合体

メディア中心主義的なメディア論から非メディア中心主義的なメディア論へ、換言すれば社会指向のメディア論に向かうクールドリーの議論に関連して、メディア論内部における相違と社会の概念について検討してきた。メディア論の存在意義に関わるように思われていたメディア中心主義から距離をとって社会理論に向かう一方、クールドリーは、現代のメディア概念についても、幾つかの指摘を行っている。

<sup>7</sup> メディア論としてはイニスやマクルーハンのみならず、キトラーが想定されている。なお、クールドリーとは異なり、イニスとマクルーハンのそれぞれについて、程度は異なるものの、技術決定論とは異なる側面に注目する立場も考えられる。

<sup>8</sup> クールドリーは、メディア中心主義といったレトリックを採用している。彼の議論がバランスを重視するように見えるのは、何らかの中心主義への批判が自身に向けられることへの事前の対応であるのかもしれない。ただし、クールドリーに対しては、西欧中心主義との批判もなされている。

まず、メディア概念に関しては、新聞、ラジオ、テレビ、映画など伝統的なメディアよりも広い意味で用いられている。第一に、「メディア」という語は、クルードリーの著作では、「コンテンツの生産、普及、受容の制度化された形式、及びそのためのプラットフォーム」を指すものとして用いられている (Couldry, 2012: v iii)。第二に、今日のメディアは環境化し、‘media environment’ という言葉も用いられるようになってきている。第三に、メディアはネットワーク化している。アナログであれデジタルであれ、今日のメディア利用は、孤立した単一のメディアのみならず接続されたメディア利用によって特徴づけられている。このような複数のメディアの相互的結合ないし接続を示すため、メディアの集合体manifoldという語が用いられる (Couldry, 2012:16)。多数のメディアが接続されている以上、メディアが作動する場所は、孤立した単一のメディアとは異なるものと考えられる。

誰が、いかなるチャンネルで、誰に対して、どのような効果とともに、何を言うか。20世紀半ばにラスウェルが提示したこの問いを再検討することは本稿の課題を超える。だが、ユーザー生成コンテンツの流通やSNSを想起すれば、whatやwho が伝統的メディアとは異なることを想像できる。そして接続されたメディア集合体の存在は、メディア研究のwhereという問いの答えを、かつてとは異なるものにしてはいるはずである (Couldry, 2012:12-17)。

## 2.1 実践理論の方へ

オーディエンス研究から出発したクルードリーは、デジタル・メディアを用いた、一般の人々によるメディア実践を研究しようとする。メディア・テキストではなく、実践を研究する際に、手がかりとなるものは何か。しばしば理論と実践などといわれるが、実践をどのように理論的に位置づければよいのか。クルードリーが参照したのは、哲学者・社会理論家T. シャツキの実践理論である。

社会と個人という伝統的な問題に対しては、社会と個人、双方の次元において全体性が批判された後、実践に注目する議論が展開されてきた (Schatzki, 1996:1-9)。実践としてのメディアを探求してきたクルードリーは、『メディア、社会、世界』の第二章でT. シャツキの実践理論を紹介した後<sup>9</sup>、多様なメディア関連実践とその複合を提示している。以下では、まず、クルードリーの議論の前提となるシャツキの理論に遡り、『社会的実践 人間活動と社会的なものについてのワイトゲンシュタイン主義的アプローチ』(1995年)を中心に確認する<sup>10</sup>。

## 2.2 プラクティスの三つの概念

ワイトゲンシュタイン派の社会理論家シャツキは、著書『社会的実践』の第4章で実践についての理論を提示している。その前提となるのが実践の三つの意味である。

第一は、訓練や練習としてのプラクティスである。繰り返し何かに取り組むことによって、方法を学んだり、能力を改善したりすることである。楽器の練習などが例となる。身近な語義ではあるが、シャツキの理論で重視されるのはこれ以外の語義である。

第二は、シャツキ (1996) の提示した実践理論の核心をなすプラクティスの語義である。料理や投票、産業や娯楽、収集に関わる実践など、「振る舞いdoingsや発言sayingsが時間的に展開し、

<sup>9</sup> ブルデューとギデンズも実践理論家とされるが、シャツキはワイトゲンシュタインを重視し、自らのアプローチの優位性を主張する。

<sup>10</sup> Schatzki (2002) では、アレンジメントの理論が導入される。実践ないし組織化された活動は、人、物、人工物などの実体の配置(アレンジメント)とともに、人間共在のコンテクストを形成すると考えられる。

空間的に分散した結合体としての実践」である。振る舞いや発言の結合体ないしネクサスの形成には、三つの結合の仕方linkageが考えられる<sup>11</sup>。まず、1) 例えば、言うべきこと、なすべきことなどに関する「理解」を通じて振る舞いと発言が結合される<sup>12</sup>。次に、2) 「明示的な規則と原則、指針や指示」などを通じて、そして、3) 「目標ends、プロジェクト、タスク、目的purposesや信条、情動、そしてムード」など、シャツキが「目的論的情緒的」構造“teleoaffective” structuresと呼ぶものを通じて振る舞いや発言が結合される (Schatzki, 1996:89)。

第三は、行為や活動の遂行としての実践である。それは第二の意味での実践を遂行することであり、それが第三の意味でのプラクティスとなる。「理論と実践」、「観想と省察」対「なすこと」doingなどと伝統的に対比されてきたが、その際の実践と第三の語義は重なる。ただし、観想や省察それ自体が人の行う活動でもあり、図式的な対比には慎重さが求められる。行為や活動の遂行としての実践概念は、人間の生活が「活動の流れ」としての「持続的な出来事」から成ることを示す。それによって私たちは、人間存在が、遂行や実行などの「出来事」からなることを思い起こす。そのような点で第三の意味は重要である。この意味での実践は、第二の結合体としての実践を実現化するものである。

こうして、シャツキ (1996) においては、(1) 訓練や練習としてのプラクティス、(2) 理解や規則、目的論的情緒的構造 (目標、情動、ムードなど) による、振る舞いや発言の結合体としての実践、また、(3) 行為や活動の遂行としての実践が想定され、とりわけ (2) と (3) が重視された (Schatzki, 1996)。

## 2.2.1 分散的实践

シャツキの議論では、さらに、「分散的」実践と「統合的」実践が峻別されている。まず、「分散的」実践は、社会生活の多様なセクターに幅広く「分散」して生起する実践であり、そのことが統合的実践との違いとなる。分散的実践の例となるのは、「記述、命令、規則遵守、説明、質問、報告、試験、想像」などである (Schatzki, 1996:91)。分散的実践を説明する際、シャツキは、あえてワイトゲンシュタインの文章を引用する<sup>13</sup>。「ある規則に従い、ある報告をなし、ある命令を与え、チェスを一勝負するのは、慣習 (慣用、制度) なのである」(『哲学探究』199)。

次に、Xすることの分散的実践とは、Xすることの「理解」によって結合された振る舞いと発言のセットである。この「理解」を構成するのは次の要素である。まず、記述や命令や質問など、(1) 「Xする行為を実行する能力」、次に (2) 「この行為はXすることであると」 「Xすることを識別したり、帰属させたりする能力」<sup>14</sup>、そして (3) 「Xすることを促すか、反応する能力」である。なお、ここでいう「能力」とは、「ハウトゥを知っていること」を意味する (Schatzki, 1996:91)。

<sup>11</sup> 振る舞いと発言は、因果連鎖を通じて結合され、原因と結果として表れることがある。それが同じ実践の場合もあれば、異なる実践の行為の間で、因果的な連鎖による結合が成立する場合もある。その因果性を通じて時空間のネットワークが形成されることもある (Schatzki, 1996:89)。

<sup>12</sup> Schatzki (2002) では、全般的理解general understandingの概念が導入され、実践的理解practical understandingと併存することとなった (Schatzki, 2002:77)。また、近年の論文集『実践のネクサス』(2017年) には、前者の概念に注目した論考がある。

<sup>13</sup> 後期ワイトゲンシュタインにおいて言語ゲームは、話すことのみならず、書くことを含んだ、人間の言語を用いた行動に適用される。特定の言葉を用いた原初的な言語活動から複数の言葉を用いた活動も事例となる。また、空想的な対話や、行為に対して言語が付随的な役割を果たす場合などもある。言語ゲームには多様な事例が考えられるが、言葉話すことの、活動や生活様式としての特質が強調されている。全ての言語ゲームが分散的実践とはいえないとはいえ、ワイトゲンシュタインの議論する言語ゲームの多くは分散的実践と呼ばれる資格がある (Schatzki, 1996:95)。

<sup>14</sup> 自分自身の場合も他者の場合も含まれる。

全ての分散的実践がこれら(1)から(3)までの要素を備えているわけではない。とりわけ(3)の促しと反応に関する能力は、どんな分散的実践にも認められる特徴ではない。この特徴が成立するのは、促しや反応の仕方が確立されている場合である。筆者にとって(3)の促しと反応の例と思われるのは、質問と返答、命令と従うこと、挨拶状とその返事、記述と報告の依頼、そして記述や報告をすることなどである。さらに、Xすることに対する確立された促しや反応は、別の分散的実践を生み出すことがある(質問と返答、そして助言に従うことなど)。このことが示すのは、分散的実践は、相互に隔離されているのではなく、結合体のなかに「織り込まれている」ということである。しかも、その分散的実践は、社会生活の様々なセクターのなかで分散して生起する(Schatzki, 1996:91)。

## 2.2.2 統合的実践

分散的実践に対比されるのは統合的実践である。〈分散的〉実践が様々な社会セクターに「分散」して生じるのに対して、〈統合的〉実践は、社会生活の特定の領域に見られるものであり、分散的実践より「複合的」なものとなる<sup>15</sup>。農業やビジネス、投票、教育、祝祭、料理、リクリエーション、産業、宗教、銀行での業務ないし取引bankingなど、様々な統合的実践が考えられる(Schatzki, 1996:98)。

ただし、分散的実践と同じく、統合的実践は、振る舞いと発話が結合されておりlinked、集合をなしている。統合的実践を結合するのは次のものである。(1)「Xすること、Yすること(その他)などの『敏感な』“sensitized”理解に加えて、Qすること、Rすること(その他)などの理解」。(2)「明示的な規則や原則、そして指針や指示」。(3)目標やタスク、そしてプロジェクト、さらには信条や情動、ムードなどのヒエラルキーを含む目的論的情緒的構造(Schatzki, 1996:98-99)。これらによって統合的実践は結合される。

理解や規則、目的論的情緒的構造などによって、統合的実践の振る舞いや発話が結合されることは実践の「組織化」と呼ばれる。この実践の組織化を通じて、世界の意味やどの実践が意味するかなどの事柄が明確化／節合articulateされる(Schatzki, 1996:111)。

目的論的情緒的構造によって統合的実践の振る舞いと発話が結合されるという場合、シャツキが意味しているのは、「目標、目的、プロジェクト、行為、信条、そして情動などのヒエラルキー的秩序」を行動が表している、ということである。ヒエラルキー的秩序についての例を挙げてみたい。西洋料理には、「軽食作りmaking snacks、軽くキツネ色にすることlightly browning、前菜を手早く作ることwhipping up appetizer、乱切りchopping」、そしてピッキング(砂糖や香辛料、そして酢を使用して行われる保存処理)やグリル(網焼き料理)など、多様な行為があり、「健康的な食事の準備」などといった目的も考えられる。西洋料理実践は、様々な目的やプロジェクト、行為や作業taskを含んでおり、「ある行為とプロジェクトが他のあるプロジェクトと目標endsのためになされる」、という意味でヒエラルキー的秩序を形成しうる(Schatzki, 1996:100-101)。このような目標ないし目的のヒエラルキーは、調理人や料理本、親から指示される場合もあれば、指示されない場合もある。目的論的情緒的構造が、目的だけに関わって、情緒ないし情動が抜け落ちる場合もある。例えば、一般に養育実践にとって愛などの情緒性が適切とされる一方で、料理に適した情動というものは考えにくいとシャツキはみる(Schatzki, 1996:101)。

<sup>15</sup> 逆に言えば、ある意味では、統合的実践よりも分散的実践の方がより単純である(Schatzki, 2002:88)。

### 2.2.3 分散的实践と統合的实践

異なる社会セクターに分散している実践と特定領域に見られる実践という対比において、分散的实践と統合的实践は対照的である。分散的实践が組み合わされて統合的实践となるわけではない。というのは、分散的实践が統合的实践に合流する過程で変形が生じるからである (Schatzki, 1996:99)。なお、分散的实践が統合的实践に合流する過程で変形するのみならず、「ビジネス、料理、そして育児」などといった統合的实践それ自体が地域や企業や家族によって変化する (Schatzki, 1996:104)。

常にではないけれども、人は、統合的实践と分散的实践の双方に従事することがある。例えば、何かを記述する場合、農業や料理、教育などの特定領域の統合的实践に従事している場合がある。記述describingの実践は、分散的实践でも統合的实践でもあり得る (Schatzki, 1996:99)。

## 3. メディア論と実践理論の間で

1990年代半ばのシャツキの著作『社会的実践』から、実践理論の展開される4章の議論の一部分を紹介してきた。一部分となったのは、『社会的実践』を含めて実践理論の内容が汲み尽くし難いこと<sup>16</sup>、また、詳細に紹介すればするほど一般的なメディア論のイメージとの距離が生まれるのでは、との懸念も背景にある。技術中心ないしテキスト中心のメディア論ではなく、メディアに関する人びとの実践について考える場合、クルドリーがしたように、実践理論がその基礎として参照されてもよいはずである。また、社会理論の領域で展開された実践理論を参照することは、メディア中心的メディア論との相違に通じるものと思われる。しかし、実践理論の理解と応用は、必ずしも容易ではないのも確かである<sup>17</sup>。ここで、シャツキの実践理論とメディア論を架橋するための手がかりを幾つか記しておく。

### 3.1 メディア関連実践と複合的なメディア関連実践

一つ目の手がかりは、クルドリーの議論である。2000年代の半ばの論考、「メディアを实践として理論化する」において、彼はメディア論の新たなパラダイムとして実践理論を探求した (Couldry, 2004)。2010年には、その論考を収録した『メディアと実践を理論化する』と題したメディア人類学の論集が編まれる<sup>18</sup>。だが、本稿で取り上げているのは、クルドリーによるその後の単著、『メディア、社会、世界』(2012年)である。その第二章でシャツキの議論を紹介した後に、クルドリーは幾つかのメディア関連実践 (media-related practice) の例を提示している。すなわち、検索<sup>19</sup>と検索を可能にすること (search-enabling)<sup>20</sup>、見せること<sup>21</sup>と見せられること、プレゼ

<sup>16</sup> 実践理論と一言でまとめられるような、統合された実践理論があるわけではない (Nicolini, 2012)。本稿ではシャツキ (1996年) を中心として実践理論を紹介しているが、その場合でも時期によって相違がある。

<sup>17</sup> メディア人類学のみならずメディア研究における実践理論の論文集が既に存在するが、本稿では後者を紹介することはできなかった。

<sup>18</sup> 全体で四部構成の書物であるが、第一部の一章はクルドリーの論考、二章は批判者M.ホウバートの論考、そして三章は両者の共著となっている。第一部の理論編以外では、欧米、アジア、アフリカにおけるメディアのエスノグラフィックな研究内容を含み、中にはクルドリーやホウバートの論争へのコメントも見られる (Bräuchler and Postill 2010)。

<sup>19</sup> クルドリーは、ウェブサイトに接する方法は、既知のサイトのリンクを辿るか、検索するかであるというM.ハインドマンの見方を紹介する。ただし、現在のお気に入りのサイトでさえ、もとは検索で見つけたサイトの場合もあるとも述べられる (この他にも、参考文献リストを辿ったり、知人から教えてもらったりなど様々な可能性があるのではないか)。検索は解釈的行為の幅を拡張するが、より身体的な事柄にも関連する。例えば、地図を持たずに外出し、スマートフォンを用いて現地で検索するなどといった事例では、知識の形成と使用のあり方が従来の時空間とは異なっている (Couldry, 2012:45)。

ンシング<sup>22</sup>、アーカイヴィング<sup>23</sup>などがクールドリーの示したメディア関連実践である。これに加え、彼は、複合的なメディア関連実践についても述べている。ニュースについていくこと<sup>24</sup>、コメンタリー<sup>25</sup>、総てのチャンネルを開けること<sup>26</sup>、ふるい分けscreening out<sup>27</sup>などの類型が提示される。

実践は、クールドリーによれば、しばしば習慣的なものである。習慣は、日常生活における大きな習慣のなかに織り込まれており、一つの習慣を取り出すと全体が変化する可能性もある。あるメディア関連実践を考える場合も、時には非メディア関連実践を含む、多くのメディア関連実践の複合的な接合について考える必要がある (Couldry, 2012:53)。

クールドリーの『メディア、社会、世界』の第二章では、実践理論の紹介の後、メディア関連実践及び複合的なメディア関連実践の例示がなされていた。この著作は、メディア論の側から実践理論の方に架橋する試みの一つと思われる。もっとも、クールドリーは実践理論を単に応用するのみならず、幾つかの問題提起も行っている。シャツキの著作『社会的実践』では、社会性が論じられているものの、世界やグローバル化の問題などは重視されていなかった。また、後述するように、メディア論的発想も断片的なものであった。これらの点で、クールドリーの『メディア、社会、世界』には、シャツキの実践理論に対する創造的補足という側面もあるものと思われる。

### 3.2 シャツキにおけるメディアと物

もっとも、他の領域で応用された実践理論については、それを外在的な議論として不充分だと

<sup>20</sup> 検索を可能にすること (search-enabling) の例としては、家族や知人間の情報交換でのウェブリンクの転送がある。また、ユーザーの推奨ウェブサイトを集めて蓄積した倉庫サイト (Diggなど) によって他のユーザーは「検索実践」を抑制できる (Couldry, 2012:45-46)。ウェブサイトであれ知人であれ、検索を可能にする実践は、各人がグーグルで直接検索するのとは別の選択肢を提供しているが、やはり検索への依存は考えられる。また、集合的な情報交換による情報のソーティングのなかに社会的な絆の形成への期待がある一方で、一般の人々の情報交換の中に、商業的、時には政治的なマーケティングの要素が入り込む可能性も考えられる。

<sup>21</sup> 例えば、Dog Trust Salisburyによって新しいオーナー向けの犬の映像がYouTubeに投稿されているなど。

<sup>22</sup> 個人であれ、集団であれ、直接的な身体性を超えた、公的な存在感の維持に関わる (Couldry, 2012:50)。具体的には、著名人がオンライン上で存在感を維持するためにTwitterを用いる場合がある (Couldry, 2012:41)。

<sup>23</sup> 時間の領域でプレゼンシングに対応するものがアーカイヴィングである。例としてはYouTubeやFacebookなどが言及される。個人のレベルでは、かつては、日記やフォトアルバムなどの形態が支配的であったが、Flickrなどのサイトでは、写真がオンライン上で「共有」されるようになっていく (Couldry, 2012:52)。また、Instagramにおける写真や動画などもアーカイヴィングに関連すると思われる。

<sup>24</sup> 今日、ニュースについていくことは小さな実践の接合である。テレビやラジオの定時ニュースのみならず、フリーペーパーやウェブを介したニュース消費、知人からのメールのリンクを辿ること、ブログを介したニュースへのアクセスも考えられる。職場のコンピュータからのオンライン・ニュース消費やモバイル・メディアのニュース用アプリなどを考慮すると、ニュースについていくことの時間と空間のパターンは多様である (Couldry, 2012:53-54)。

<sup>25</sup> 写本文化では先行する読者ないし古典注釈者の記した欄外の注釈とともに写本が別の読者の手に渡ることがあったといわれる。情報過多の現代では、私たちは、情報を選択する助けになる合図やコメンタリーを互いに送り合うようになった。こうした能力は、デジタル・メディアによって補強される一方、昔は東の間の存在であった感想の痕跡がオンライン上に残されることになった。コメンタリーの営みでは、間テキスト性は日常的で顕在的なものとなっている (Couldry, 2012:54-55)。なお、Twitterでは、オーソライズされることなくコメンタリーがなされている (Couldry, 2012:41)。

<sup>26</sup> デジタル・ネイティブ世代は絶えざる接続性を特徴にしていると考えられる書き手も多い。もっとも、実際には、文字通り、全てに対してチャンネルを開けることは無理である (Couldry, 2012:55)。

<sup>27</sup> 全てのチャンネルを開けることには問題が伴うため、現代では、情報の選別は重要になっている。合衆国では、児童のメディア接触を制限する親についての研究もなされている (Couldry, 2012:55-56)。

考える読者もいるかもしれない。これに対して、シャツキの著作に対してより内在的にメディア論との接点を探ることも考えられる。第一の手がかりは、分散的实践及び統合的实践の例を、メディアを想起しつつ、読み直すことである<sup>28</sup>。今日では、何らかの形で様々な実践に現代メディアが関与していると考えられる。この場合、シャツキの『社会的実践』を現代的視点から読み込むことになる。もっとも、現代のモバイル・メディアを想起しつつ、上述した分散的实践及び統合的实践の例を再読したにせよ、それによって生じる理論的なインプリケーションの相違は検討課題として残るはずである<sup>29</sup>。

第二の手がかりは、シャツキの『社会的実践』の後半部分に含まれたメディアについての議論である。シャツキは、パーソンズの議論を紹介しつつも、貨幣、権力、価値コミットメント、影響をコミュニケーションのメディアと見なすことにはやや批判的である。メディアとは、直観的には、情報の流れに関わるものである。シャツキによれば、コミュニケーションの「メディア」とは、言語行為を含む「知覚と行為」であり、(例えば音や電話回線、そして衛星放送やたばこの煙をばく息などといった)「物理的な回路基板substratesと連結connections」である(Schatzki, 1996:182)。人間の共在が論じられた章の中でコミュニケーション・メディアが言及されたことそれ自体は興味深い。少なくとも、『社会的実践』(1996年)における、メディアの定義や関連する議論はやや断片的であると筆者には思われる<sup>30</sup>。むしろ、メディアという語にこだわるのではなく、シャツキのいう「理解可能性」をめぐる議論——アーティキュレーションと意味が前提となる——について再考する方が、世界や事物、行為の意味が立ち現れる際の意味と媒体ならびに遂行性について考える手がかりになるのかもしれない。

第三の手がかりは人工物や物についての記述である。シャツキの『社会的実践』(1996年)以後の著作である『社会的なもの場』(2002年)では、人間の共在する特殊なコンテクストが「社会的なもの場」と呼ばれる。『社会的実践』と比較した場合、『社会的なもの場』は、人工物やモノなどが頻繁に言及される点が特徴的である<sup>31</sup>。シャツキによれば、社会的な生活が生起する現場としての社会的なもの場を構成するのは、実践と秩序の網目である。一方には、組織化された活動としての実践があり、他方には、諸実体(人、人工物、物)のアレンジメント<sup>ネクサス</sup><sup>32</sup>としての秩序がある。組織化された活動と配置された物の、絶えず変容する結合体として人間の共在は成立する

<sup>28</sup> 本稿では紹介しなかったものの、メディア産業へのPR依頼に関する例のなかで電話が言及されていた(Schatzki, 1996:112)。これは事例のなかの背景としてメディア関連の舞台設定がなされていたという印象である。また言語について、それが分析の行われるメディアであるという発想もシャツキの著作に見られる(Schatzki, 1996:128)。

<sup>29</sup> 後述する人工物や物に注目する議論、マテリアリティの問題など。従来の社会理論では十分に考慮されてこなかった物質性を体系的に考慮するための議論もなされている(Schatzki, 2010)。

<sup>30</sup> シャツキにおける「メディア」には様々な用法がある。分析が行われるメディアとしての言語(Schatzki, 1996:128)や共在のメディアmedia of coexistence(Schatzki, 1996:185)などが語られるが、本稿の議論とはやや文脈が異なるものと思われる。理解可能性をめぐる議論において、実践のなかで意味するものを考えることが、意味の媒体論に通じるものと思われる(Schatzki, 1996:112)。

<sup>31</sup> アクターネットワーク理論に対するシャツキの関係は単なる依拠ではなく、批判も含む複雑な関係のようである。ただし、アクターネットワーク理論における「ネットワーク」とシャツキがアレンジメントと呼ぶものの類似性も指摘される(Schatzki, 2010:134)。

<sup>32</sup> 『社会的実践』と比較すると『社会的なもの場』では、アレンジメントという用語がより多用されるようになってきている。もっとも、dispositif, agencements, réseaux, network, discourseなどアレンジメントの原語は多様である。シャツキは、布置のなかで組織化された物の相互規定的な関係を指して用いているようである。結合されたモノが、結合された他のモノに影響を与えつつ、その布置のなかのモノから影響を受けることを指している(Schatzki, 2002:xiii)。なお、シャツキは、自身の用語としての「アレンジメント」がアクター・ネットワーク理論の「ネットワーク」に類似していると述べる一方、自身の「実践」に対応するものはANTにはないため、「実践」と物質的アレンジメントの関係の研究に支障を来すとの

(Schatzki, 2002:xi)。これら社会的なもの場ないし人間共在のコンテクストに関する議論では、組織化された活動としての実践のみならず、人工物や物など諸実体のアレンジメントも考慮されるようになっている。社会的生活が生じる場を構成する実践と秩序の綱目について考える場合、換言すれば、組織化された実践と、相互規定的な布置のなかにある人工物について考える場合において、仮にコミュニケーション・メディアとしての人工物について検討するなら、それがメディア論的思考との接点になるかもしれない。

### 3.3 実践理論の展開

第四に、実践理論のその後の展開からメディア論との接点を探る方向性も考えられる<sup>33</sup>。ここでは、シャツキの著作に内在的な議論というよりは、より広く実践理論からメディアや技術に接近する議論を参照する。手がかりとなる言葉は「物」である。2002年にレックヴィッツが発表したレビュー論文「社会的実践の理論に向かって」によれば、『実践』(Praktik)は相互に結合された幾つかの要素からなる、行動のルーティン化された型である。身体活動の形式、心的活動の形式、『物』とそれらの使用、理解の形式における背景知識、ノウハウ、情動の状態と動機的な知識である(Reckwitz, 2002: 249)。この「実践」の定義の中には「物」が含まれている。レックヴィッツによれば、第一に、物objectsは、実践理論にとって、身体や心と同様に、不可欠な構成要素をなしている。ある実践の遂行は、しばしば物の使用に関わっている。フットボールを実際にプレイするには、ボールやゴールなどの「物」が必要となる。実践理論にとっては、「物」も必須の構成要素である。第二に、キットラーなどに言及しながら<sup>34</sup>、レックヴィッツはメディア論的視点を自身の論文に組み込んでいる。それによれば、書くこと、印刷、電子メディアなどが、社会的実践(とりわけ言説的実践)を「かたどる」‘mould’場合があるという。あるいは、それらのメディアが、「実践の要素として、ある種の身体的活動や心的活動を可能にし制限し、また……ある種の知識や理解を可能にし制限する」(Reckwitz, 2002: 253)。このように、実践理論のレビュー論文にメディア論的視点が含まれていたことは留意すべきである。さらに、実践における物の重視は、社会秩序の生産と再生産を考える際に主体と主体をめぐる問題系を主体と対象をめぐる問題系に優先させてきた従来の社会学的発想からの転換でもある。

実践理論の歴史的展開を総覧することは本稿の課題を超える。ただし、2017年には、実践理論を展開する研究者たちの論文集『実践の結合体』<sup>ネクサス</sup>が刊行されており、それが近年の実践理論の展開を示すものと思われる。そこでは、実践理論に対する批判への返答と現代における実践理論の多様な展開を確認できる。一方では、実践理論は小規模な実践のみに有効な議論だという批判に応え、大きな事象が扱われている。他方では、教育(ラーニング)、医療(病院生活と建築物)、情動理論、言説分析、実践のマテリアルな関係など、一部は技術論的な議論も含まれている。『実践の結合体』<sup>ネクサス</sup>を読むならば、メディア論から実践理論に向かうのとは逆に、実践理論から技術論や技術の哲学に接近する道筋もあることが了解される。ただし、それは必ずしもクールドリーの議論と重なるとは限らず、むしろ「技術」という広大な領域を前にすることにもなる。

立場をとる(Schatzki, 2010:134-135)。「物質的アレンジメント」は、相互に連結された物質的な実体のセットを指して用いられ、人間、人工物、有機体organisms、自然のものthings of natureに分けられる(Schatzki, 2010:129)。実践とアレンジメントの関係は、因果性、予想、構成、理解可能性である(Schatzki, 2010:139-141)。

<sup>33</sup> なお、シャツキの『社会的実践』(1996年)以前にも「実践理論」に関する著作は出版されている。

<sup>34</sup> クールドリーによれば、キットラーは社会指向のメディア論とは対極のメディウム理論に分類される。ただし、実践理論家によって部分的に取り入れられ接合されたメディウム理論は、もとのそれとは同じものではないものと思われる。

### 【引用参考文献リスト1】

- Bougnoux, D. (2001) *Introduction aux sciences de la communication*, La Découverte. (=2010年、『コミュニケーション学講義』水島久光監訳・西兼志訳、書籍工房早山)。
- Bräuchler, B. and Postill, J. (eds) (2010) *Theorising Media and Practice*, Berghahn Books.
- Couldry, N. (2004) “Theorising Media as Practice,” in *Social Semiotics*, volume 14 Number 2, pp. 115-132.
- (2006) “Transvaluing Media Studies: Or, Beyond the Myth of the Mediated Centre” in J. Curran and D. Morley (eds) *Media and Cultural Theory*, Routledge, pp. 177-194.
- (2012) *Media, Society, World: Social Theory and Digital Media Practice*, Polity Press.
- (2013) “A Necessary Disenchantment: Myth, Agency and Injustice in the Digital Age” *public lectures and events at London School of Economics and Political Science*, <http://www.lse.ac.uk/lse-player?id=2120>, accessed at 29 August.
- Giddens, A. (1990) *The Consequences of Modernity* (=1993年、『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房)
- Hui, A., Schatzki, T., Shove E. (2017) *The Nexus of Practices: Connections, Constellations, Practitioners*, Routledge, 2017.
- Nicolini, D., *Practice Theory, Work & Organization*, Oxford University Press, 2012.
- Reckwitz, A. (2002) “Toward a Theory of Social Practices: A Development in Culturalist Theorizing”, *European Journal of Social Theory* 5(2) 243-262.
- Schatzki, T. R. (1996) *Social Practices, A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, Cambridge University Press.
- (2001) “Introduction: Practice Theory,” in T. R. Schatzki, K. K. Cetina & E. V. Savigny (eds) *The Practice Turn in Contemporary Theory*, Routledge.
- (2002) *The Site of the Social: A Philosophical Account of the Constitution of Social Life and Change*, Pennsylvania State University Press.
- (2010) “Materiality and Social Life,” in *Nature and Culture*, 5(2)123-149
- Woodstock, L. (2014) “Media Resistance: Opportunities for Practice Theory and New Media Research,” in *International Journal of Communication* 8

### 【引用参考文献リスト2】

- ワイトゲンシュタイン, L (2002) 『ワイトゲンシュタイン全集8 哲学探究』藤本隆志訳、大修館書店。
- ギデンズ, A (2005) 『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳、ハーベスト社。
- デリダ, J (1990) 『根源の彼方に グラマトロジーについて 上』足立和浩訳、現代思潮社。
- (1992) 『ポジション』高橋允昭訳、青土社。
- 福士正博 (2016) 「持続可能な消費と社会的実践：序論」『東京経大会誌』291号、83-104頁。
- 森田敦郎 (2007) 「機械と社会集団の相互構成——タイにおける農業機械技術の発展と職業集団の形成——」『文化人類学』71 (4)、491-517頁
- 門部昌志 (2017) 「メディア社会学の残像——メディアの社会学思想史 I 」、『研究紀要』第2号、29-44頁